

### 3. 4 福島県での活動

#### 健康生きがいくくりアドバイザー福島県協議会

##### 1. 事業概要

###### (1) 事業の目的

被災した福島県民の心の復活を支援すること

###### (2) 実施体制、他団体との連携、他地域との連携状況

支援する側のネットワークについて

- 行政 被災地区、大熊町、双葉町、富岡町、浪江町をはじめ、県内市町村からの協力・支援体制
- 社会福祉協議会 生活支援安定事業に理解を示して頂き、県内各市町村社協は協力していただけることになった
- NPO法人 ハートネットふくしま（発災以来、避難住民への生活支援をしている災害支援ボランティア団体

###### (3) 事業の実施内容

###### ① 生活安定支援に関する聞き取り調査

仮設住宅、住民、行政に生活安定支援の件で聞き取り調査を実施した。

- 1) 発災14ヵ月、避難者には救援物資は十分届いている。
- 2) 仮設住宅内、集会所などではコミュニティづくりのための仕掛け、行事はでき上がっている。
- 3) 生活支援員による健康、生活支援、見守り等、充実度が進んでいる。

しかし、

- (イ) 帰還困難地域（原発地区）では、“仮の街”づくり構想も進行しているが、東京電力の損害賠償の決着、国の事後政策の決定後は、三々五々、次の生活基盤づくりのための県内、県外に新天地を求めることになり、町のコミュニティは崩れて行く。
- (ロ) このため“自立のための健康、食育、法律講座”を健康生きがいくくりアドバイザー福島県協議会が計画中。
- (ハ) 放射能汚染が続き、萎えた県民への元気支援、被災者への生きがい支援が急務。このため、「健康生きがいくくりアドバイザー」を養成して、県内各地で活躍して頂くことにした。

② 物資等の支援活動から“心”（生きて行く力）を回復させることに力点を置く事業

1) 相談活動のための人材の養成事業

＜平成 24 年 6 月の福島県の実状＞

東日本大震災、津波被災、そして福島第一原発の事故による放射能被害が事故後 1 年 3 カ月を過ぎても、その余波が続き 15 万余の避難者が仮設住宅や借り上げ住宅で暮らし生活は困窮を極めていた。

原発事故により避難区域再編がほぼ明確になり、帰還困難、居住制限、避難指示解除準備の 3 区域に再編された。

原発避難住民調査では、「10代～30代」では「戻らない」50%越え、その他の住民も「帰町の意味はわからない」46%と、まだまだ判断に迷いがある状態。

仮設住宅に住む被災者調査で、約40%が「健康状態が悪くなった」と回答、被災地に対する世間の関心が薄くなったと感じる被災者は半数を超え、長引く仮設住宅生活が心身の負担になり、焦りを感じる被災者の姿が浮き彫りになっていた。

＜生活安定事業・活動テーマの探索と背景＞

健生福島ではどのような手まで活動すべきか、仮設住宅や役所などで聞き取り調査をした。

この結果、避難者への救援物資はもう十分に足りている。生活不活発による健康問題と、突然の避難生活で希望を失い「生きがいを喪失」していること。今、被災者が必要としているのは、この2点に対する手助け。それを「健康・生きがい」の専門家に今、求めている。

＜生活支援活動の設定＞

健生福島の「被災者の生活安定事業」の活動テーマを、「健康生きがいきづくりアドバイザー」を養成して、被災者に寄り添い活動していただくマンパワーの増強とした。

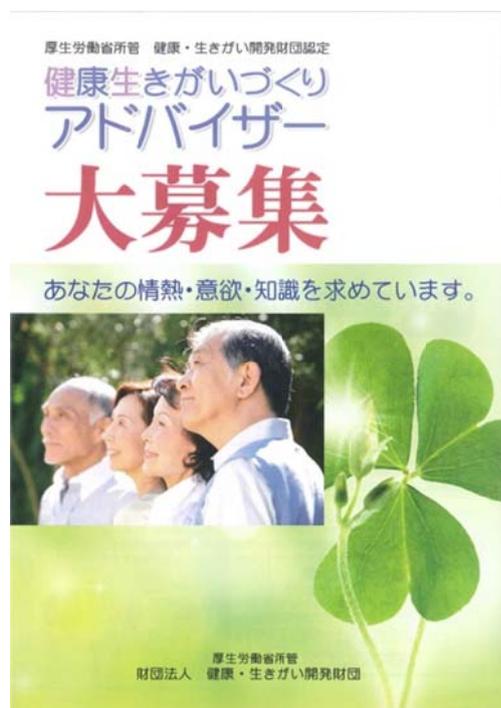
＜具体的目標とその展開＞

健生福島は「健康生きがいきづくりアドバイザー」（以下AD）を養成して、県内各地で活躍していただく事を目的に活動を開始した。

平成24年7月、AD募集活動開始。～あなたの情熱、意欲、知識を求めています～「東日本大震災」という未曾有の大震災に遭遇し、避難生活を強いられている方々や、震災後、不安な毎日を送っておられる多くの県民の皆様が、将来への夢や希望を失わずに、これからも生きがいを持ち続け、明るく元気に過ごしていただくため日頃に健康づくりや生きがいきづくりについて相談に乗ったり、助言したり、仲間づくりをサポートしたり、あるいはその仲間を核に

被災地支援のボランティア活動を進めたりする役割を担う“健康生きがいつくりアドバイザー”を求めています」というチラシを配布した。

AD募集状況は、7月中旬から資料請求、受講申し込みが68件あり、その結果、53名の受講が確定(8月末)、受講開始。



「東日本大震災」という未曾有の大災害に遭遇し、避難生活を強いられている被災者の方々や、震災後、不安な毎日を送ってられる多くの県民の皆様が、将来への夢や希望を失わずに、これからも生きがいをもち続け、明るく元気に過ごしていただくために、日頃の健康づくりや生きがいつくりについてご相談ののったり、助言したり、仲間づくりをサポートしたり或いはその仲間を核にして被災地支援のボランティア活動を進めたりする役割を担う人材＝“健康生きがいつくりアドバイザー”を求めています。

健康生きがいつくりアドバイザーは、厚生労働省所管の健康・生きがい開発財団が認定する資格です。

#### <志望動機>

- ・社協で被災者に生活支援相談員として仕事をしていますが、様々な壁にぶち当たり。自分自身の知識の無さに悩んでいました。この資格を取り仕事や、今後の人生づくり、家族やこれから出会う方々のため役立てたい。
- ・震災で、生きることで精いっぱい、夢も希望もなく失意のどん底にいました。ADの友人は、人の事を思いやり、力づけてくれ、前向きで生き生きとしていました。私は何をしているのだろうか…。目標を持ってもう一度生きたい。

- ・震災後の生活も一からのスタート、寂しさと辛さ、恐怖と不安の中から脱出したい。これから生き生きと暮らすためにも「学びたい」。
- ・原発事故で会津若松に避難しています。デイサービスで利用者にお役にたてるかな、そんな気持ちで始まりましたが、勉強を進めていくうちに「誰のためでもない、目の前に迫りくる自分の問題なのだ」と実感しています。
- ・仮設で住民の方が「生きがいが無い」そんな言葉に心を痛めていました。これまでヘルパー講座、認知症予防トレーニング、子供緊急サポーターの勉強をしてきました。ADの勉強をし「健康で生きがいを持って、皆さんが生活していける」そんなお手伝い出来たら、素晴らしい私自身になります。
- ・震災で私の知人、友人も犠牲になり悲しみの涙を流す毎日でした。自分を変えたい、自分と同じような人の、力になりたい。
- ・震災で避難生活をしています、ふる里の復興ため何かできないか…。答えが見つからない。ADになり、コミュニティの再構築で町民の生活の一助に。
- ・震災にあって、人の温かさを知りました。60歳、生きがいを見つけて、他人のためになりたい、ボランティアで活動したい。
- ・高齢社会ではこのようなADは必要になるでしょう。福島のために頑張ります。
- ・仕事人生も卒業 これまでの人生経験を生かし活動できるラストチャンス。社会貢献できれば、目的ある生きがい共感できる。
- ・定年退職後、組織社会から独立した個人活動へ。同世代仲間がこれからの生き方、生きがい求めをしています。これまでの知識、経験を生かしADとして避難者の支援活動をしていきたい。

震災を契機に、困窮者に接しこれに役立ちたいという人間の奥底にある本能が芽生え、行動に表れたようだ。42名が通信講座等を修了し、認定研修会へ。

<認定研修会>

12月8日(土)、9日(日)、郡山市・南東北卸商センターで開催。受講者は初めての顔合わせ、自己紹介でそれぞれのプロフィールや志望動機などを理解し同じ心の同士として研修に入った。交流会では、すっかりうちとけて、認定後の活動を話し合っていました。2日目のグループワークに入ると、これまでの学習やADの活動の具体的テーマとその達成方法などを協議した。



## 2. 事業成果

### (1) 成果

生活安定事業の一環として、相談活動などを行う人材として、40名の健康生きがいがづくりアドバイザーを養成することができた。

### (2) 問題点・課題

相談活動を行うための、待望のADが誕生したが、この方々が被災者に寄り添い有効な活動ができるよう、その体制を整える必要がある。

そのために具体的には、以下の5つのことを進めて行く必要がある。

- ①AD（健生福島）の名簿（得意分野など）を制作する
- ②健生福島の本部機能を充実させる（福島、郡山、会津、いわきに支部を開設し地域に密着して活動を進める）
- ③支部長他を選任して、具体的な活動計画を作成する
- ④現地での活動が円滑に進むよう指導を強化、応援体制づくりをする
- ⑤各地でどのような活動機会があるか調査する

### (3) 今後の展望

現在の福島県の実状は、東日本大震災により東京電力福島第一原発事故が起きて2年が経過した。福島県の一部地域では住民の期間が進むが、今もまだ15万余人が避難生活を送っている。

福島県は、東京電力福島第一原発事故に伴う、避難者向けの災害公営住宅整備で、入居者の交流の場や安心して生活できる環境確保に向けた対策を進めている。

また、県は、災害公営住宅敷地への交流スペース設置、健康維持や生きがいがづくりの為に交流会や、各種教室の開催などを進め、入居者が支えあって暮らせる環境を整えている。

さらに、福島県では、関係市町村と個別の災害住宅毎に、具体的なソフト対策を検討する計画が浮上した。

健康生きがいがづくりアドバイザー福島県協議会の会員はこの絶好の機会に活躍する場を確保したいと思っている。

「必要な人が、必要なところで活動」、「できることを丁寧に」をモットーに活動展開していきたい。